
恋姫†異伝 ～混沌砕きし星辰の将～

永月 夜刀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫＋異伝 ～混沌碎きし星辰の将～

【Nコード】

N5809M

【作者名】

永月 夜刀

【あらすじ】

異世界で暮らしていた主人公が、神の気まぐれにより別の世界に飛ばされ人助けをしながら生きて行く物語。

プロローグ（前書き）

前作を完結させていないのに、別の物語を書き始めてしまいました。
今回の作品も間違いなく原作崩壊・キャラクター崩壊がありますので嫌なかたは

回れ右でよろしくお願いします。感想でそれらのことを言われても気にしませんので

あしからず。。。。

プロローグ

真夏の寝苦しい夜、彼はいつも通り鍛錬を終え寢床に入っていた。元来寝つきのいい彼は、ベッドに寝転がると数分で眠りに落ちた。そして、気が付くと見覚えのある白い空間にいた。

「……はあ、おいおい不干涉じゃなかったのかよ」

そう一人ごち周囲を窺うが全く気配は感じない。この広い空間にたった一人だけだというのに、なぜか彼は落ち着いていた。

「で？この空間に呼んだってことはなんか用でもあんのか？」

そう問いかけるが、何かが答えるわけも無く、ただ静寂だけがその空間を支配していた。

「……おい、用件があるならさっさと出て来いよ！いるんだろうが！」

「まあ、いるのは当然だわなあ」

彼が怒りを表しながら呼びかけると、誰もいなかったはずの空間から気だるそうな男の声が答えを返した。その声を聞き想像通りの相

手であることを悟った彼は、怒りの表情も隠さぬままに相手に対して声を荒げた。

「俺があの世界に行った後は干渉なんじゃなかったのかよ！え？どうなんだ！」

「そのつもりだったんだけどなあ……」

「けどなんだよ」

「お前ってさ、5人幸せにしたじゃん？」

「はあ？」

「だーかーらー、プレシアだろ？アリシアだろ？桃子だろ？士郎だろ？」

「……4人じゃねーか」

「甘いな！あとはお前の母親だ！」

そういうながら指を突きつけてくる男に、彼は若干戸惑いながら

「母親……って、俺はまだ母さんになにも返せてないんだぜ？」

「いやーなんつーかさあ？お前がいるだけで幸せっぽいぞ？いい母親じゃね？」

「そ…そうか……って！5人幸せにしたからってなんで急に呼び出してんだよ！それに、その5人は最近じゃなくて結構前に助けてるだろうが！」

「ん？そうなのか？まゝそっちの世界と此処じゃ、時間の流れが違うってことで納得しとけよな〜」

「はあ……で？そんな事を言うために呼んだのか？え？ゼウスさんよ」

そう、彼の目の前にいるのは、かのギリシア神話の主神ことゼウスその人なのである。たとえ見た目がただの胡散臭げなチャラ男だろうとも！Tシャツにジーンズという神らしからぬ服装であろうとも！神としての威厳のへったくれもなからうともである！

「なーんか悪口言われてるような気もするけどもさあ」

「気のせいだろ？で、結局なんなんだよ」

「おう！でことで、ボーナスステージだ！」

「は？」

ゼウスはそう言うと、呆気にとられている彼を無視し自分の話を始めた。

「つまりだ、おまえさんには5人を幸せにしろってミッションを与えてただろーよ？」

「……そういえばそんなこともあったな」

「あったんだよ。んでな？5人を幸せにしたからってことで、ちょっとしたボーナスをやろうってことになったんだわ」

「……ふーん。で？」

「うん。アレだ。ぶっちゃけお前さんを異世界に送ることにしたわ」

「はぁ!？」

その言葉に彼は心底驚いていた。だがゼウスはさも陶然のように

「あゝ、もちろんだけどお前さんに拒否権なんてねーからさ」

「待てよ！俺はまだはやても、それにヴォルケNZやリインフォー
スだって救えてないんだぞ！」

「安心しろって。お前さんをそのまま送るんじゃない、無くてない、存在を複写して送るからな」

「存在の複写？」

「おうよ。簡単にいやあ全くおなじ人間が2人になるわけだ。ドッ

ペルゲンガーとかだと魂が2分割されて存在が稀薄になることによつて死んじまうんだけどもよ？こう見えても俺って神じゃん？」

「こう見えてもって……自分で言うのかよ」

「んでな？神なんだから魂の複写程度のことは簡単に出来るわけなんだわ」

「………で？」

「ちゃんと器ごと複写するから、今の力もそのまんまだぜえ」

なぜか楽しそうなゼウスだが、そんな事を言われた彼は戸惑っていた。元の世界で死んだからこの世界に来たというのに、神の気まぐれでまた異世界へ行かないといけないと言う。そんな理不尽な事等お断りだ！と言いたいが、相手はこれでもギリシア神話の主神ゼウスである。人間である彼に逆らえるわけも無かった。

「どうせ嫌だと言っても無駄なんだろう？」

「おー、さすがよくわかってんじゃん」

「話をこじらせてこのまま送られても困るからな」

「はーっはっはっ！まあアレだ。1週間後にまた呼び出して送るからよ。準備しとけよー」

「準備って何をだよ？」

「何って？食料とか酒とか？」

「持っていけるのか？」

「そんなの『ゲートオブバビロン王の財宝』に入れときゃいいじゃねーの」

「存在ごと複写されるんなら残ったほうにはいらないだろうが……」

「だったらそれ専用のストレージデバイスでも作ればいいんじゃないの？」

「……………わかった」

「んじゃま、1週間後にまた呼ぶからよく、準備しとけよな」

「了解だ」

そういうと、ゼウスの姿が薄れ始めた。彼は意識の端で「（なるほど、夢ってわけか）」と納得させられていたのだった。

それから1週間、彼は己のツテやすずか、アリサという友人の力も借りてかなり大量の食料を集めていた。その内訳は

肉類（牛・豚・鶏・馬・猪等）――――

――――約150t

野菜類――――

そうしてゼウスが言ったルールとは、まずはこの世界に来たときと同じように5人を幸せにすること。そして追加で、3人を死の運命から助けることだった。さらにペナルティとして魔法封印・宝具封印・宝具の開放封印が課せられた。そして1人助けるごとに宝具の使用可能・宝具の真名開放可能・魔法の使用可能といったように段階的に封印が解除されていくとのことだった。

「それで？他には無いのか？」

「おう、今回はその2つだなー」

「そうか……ま、頑張るさ」

「おう。あ、あと年齢は20歳で固定しておいてやっから」

「ん？どういうことだ？」

「こっちのままだと、まだ10歳程度だろ？それじゃあ闘い辛いだろうしな、魔法もつかえねえし」

「なるほどね……納得はした。ところd「あ」ん？」

「とりあえずこっちの世界に来たときに、ルーやんがした封印も開放しておいてやんよ」

「……封印？」

「お？気付いて……るわきゃないわなあ。お前さんさ、死ぬ前の記憶って知識しか残ってないだろ？あれな、産まれたばっかで死の記

憶持ってたら心が壊れたらまずいからってんで封印してあったんだわ」

「つまり、死ぬ前にあったことや。親しかった人の記憶なんかも封印されていた……と？」

「そゆこと。だから開放するぜ」

ゼウスはそういいながら指をパチリと鳴らした。するとその瞬間、割れるような頭痛が彼を襲った。そして思い出す記憶の数々……大学でのこと、友人とのこと、そして恋人とのこと……彼が頭を抱えて蹲っている前で、なぜか特大のバットを用意しているゼウス。そして……

「んじゃ、記憶も戻ったところで送るぜえ」

「グ……ま、待ちやがれ……てめえ……!!」

「だが断る！ってことで足元どーん」

その声と共に、足元に黒い穴が開いた。彼はその穴から逃げるように、落ちる寸前で飛び上がることに成功していた。しかし、激しい頭痛によっていつもの動きができないことが彼の誤算だった。

「ナイス反応！ってことで〜！逝ってこ〜い……バスターホー〜ムラー〜ン！〜!!」

「っな！てめえ、覚えてろよ！次会ったら絶対にぶっ飛ばすからなああああー」

そういいながら飛ばされた先にある穴に吸い込まれていった。そして、彼の新たな物語はここから始まるのだった。

プロローグ（後書き）

はい。ということ、私の作品を読んでもらっていたら主人公が誰かは簡単にわかる

と思われます。。。が、一応そこはまだ秘密ということ！

まあ、まだ本人は向こうの世界にたどり着いていないかもしれないかもしれませんけどね。。。。

第1話 呼ばれてなくても俺参上! (前書き)

ということで第1話の投稿です。

酒の勢いで30分程度で書き上げた作品なので生暖かい目で見てください。

あっ! 石を投げないでっ!

第1話 呼ばれてなくても俺参上!

「ぬおあああああつ!!!!」

ゼウスの野郎にぶっ飛ばされて、黒い穴に吸い込まれた……

と思ったら落ちてるじゃねーかと、とりあえず落ちないようにしねえと!

……って魔法使えねえじゃん!ど、どうすれば……ってああああああああ!

もう地面がスグソコダヨ!ぶつかるー!っていうか死ねるーっ!

って舞空術で飛べばいいじゃん……

魔法は封印されてても気とか霊力・神力は封印されていないんだもんな。

さて、とりあえずここはドコだ？この世界は何の世界なんだ？

『おーい』

とりあえず人がいるようなところまで歩いてみるか……

『おーいってば』

「っだー！なんなんだよ！」

『おー反応した〜あのさ〜』

「ああ？」

『そういえばお前さんが用意してた食料だけでもよ？』

「ん？……あ……」

『話の途中だったからもってってないだろ？』

「だな……まいったな……」

『つてことで転送してやつからさうこれってどれくらい入ってるんだ？』

「だいたい1000tほどかな」

『ふむふむ1人で？』

「900年ほど持つな」

『100人で？』

「まあ……9年ほどか」

『1000人で？』

「なんなんだよ……1年もたねえな」

『それじゃーすくねえよ！』

「はあ！？俺一人分でいいんじゃないかよ？」

『とりあえずこのデバイス1個で1000人が9年だな？』

「まあそうなるな」

『んじゃま、1個が10個……10個が100個……と』

「……なにやってんだ？」

『指輪型のちいさなデバイスにまとめといたからなー』

「は？」

『お前さんが用意してたデバイスをだなあ、複写して1000個にしてみたわけだ』

「……そんなに大量にどうしろと？」

『多いにこしたことはないじゃん？そのうち必要になってくるって！』

その声と同時に手元が小さく光り、黒い指輪が右手の中指に嵌められた。一見するとただの黒い輪のように見えるが、よく見てみると細かい意匠が凝らされていることがわかる。

「なんか……無駄にこってねえか？」

『暇潰しなのさー』

「あつそ……んで、ここはどこなんだ？」

『それは自分で調べろよな。俺は基本不干涉つつってんじゃない？』

「全く信用できないけどな」

『あ、ひっで』

「まあいいさ。んじゃこっちの世界でルール以外は自由に暮らせばいいんだな？」

『そゆこと。その世界を破壊しようとしてるヤツもいたけども～お前さんがいる時点で』

どう頑張っても壊せないようになってっからさあ』

「さいでつか。んじゃま、ゆっくり歩いてみるさ」

『おう！んじゃ頑張れよ～』

そのセリフの直後になぜか通話が切れたような感覚があり、それつきりゼウスの声が聞こえることは無かった。

『あ、そういえば名前なんだけんどもよ？』

そんなことも無かった……

「あ？」

『前の世界の名前でもいいけども～記憶も戻ったことだし前世の名

前でもいいからさ』

「大丈夫なのか？」

『その世界でお前さんのことを知ってる人間なんていないって』

「ふむ……なら前世の名前でいくか……」

『んじゃ、今度こそ！んじゃな』

「やれやれ……忙しいこって……さて、それじゃあ人がいるところまで歩きますかねえ」

そういうと無造作に歩き始めた。そう、彼の旅はこうして始まるのであった。

紹介しておこう。彼の名前は『水津樹 周治』みつきしゅうじ 運命のいたずらか

神の気まぐれか（ただのミスだが）前世で死んだ後に異世界へと転生した人間である。

すさまじいほどのチート能力を付与されているうえに、死という概念がない。つまり

事実上の不死である。しかも今回は20歳で年齢を固定してあるので不老というおまけ

までついている。まさに最強という名を冠してもおかしくない男なのである。

「おゝ、あれは……村か？」

しばらく歩いていると数km先に集落のようなものが見えた。どうやら村があるらしい。

今の服で大丈夫かどうかをしばらく観察していたが……どうやら違和感があるようだ。

そこで『ゲートオブバビロン王の財宝』の中から黒い外套を取り出し羽織ることにした。

「よし、これでいいだろう。んじやいってみるか」

そうして鼻歌を歌いながらのんびりと村へ向かって歩いて行った。村への入り口にさしかかると、目の前に薄い青い髪の少女が立ちはだかった。

そして手に持った槍を突きつけつつ……

「まて！なにものだ！」

そういつつ周治の前に立ちはだかった……が

「んゝやっぱここは村か？」

どうやらガン無視されたようだ。

「むしするなー！」

「おお？……お？」

「なにものだ！」

「あー槍なんか持って人に向けたら危ないって教わらなかったか？
お嬢ちゃん」

「ごどもあつかいするにゃー！」

……噛みました。

「……まあいいや。で、一体なに「星」ん？」

「あ！あねうえー！」

「もう！星ったら何やってるの？……どなたですか？」

「俺？なんていうか……旅人？」

「なんで疑問系なんです？」

「ぶっちゃけていうとだ。ここがどこかも分からない。よって適当に歩いてる感じ?」

「……賊じゃないんですね?」

「賊?」

「あねうえからはなれろー!」

そういうと星と呼ばれていた少女が槍を構えて突っ込んできた。周治からすればあくびが出るほどの遅さなのだが、一般人からすれば結構早いレベルである。

「?^{チャクけ}家奥義 纏?^{てんがいしんでん}針点!」

「っな! 槍の穂先の一点を見極めて、小さな串で止めるなんて……!」

説明しよう! 『?^{チャクけ}家奥義 纏?^{てんがいしんでん}針点』とは、魁! 男塾の登場人物である

三面拳最強の男こと月光の技である。その実態は人間の持つ動体視力と精神集中力を
極限まで鍛え高めた時、初めて可能となる見切り技で物体の中心点を正確に突く事により、その動きを停止させることが出来るのである。

「多少は槍を扱えるみたいだけど、まだまだ甘いなあ」

「にやめるにゃー！」

噛み噛みである。

「はっはっはっは」

「よけるにゃー！」

「星！やめなさい！」

「ところで、ここはどこでお嬢さんは誰なんだい？」

「はーにゃーせー！」

少女の持った槍の穂先を軽く摘み動きを止めさせると、少女の姉にそう切り出した。

「あー、先に名乗っとくわ。俺は水津樹 周治、しがない旅人だ」

「私は趙統と申します。ここは常山郡真定県の村ですよ」

「……趙統？」

「はい、この子は趙雲と言います。ほら、ちゃんと自己紹介しなさい?」

「せいはちょう、なはうん、あざなはしりゅうです!」

「……趙雲」

きちんと自己紹介できたことで姉に褒められ、にこにここと微笑んでいる姉妹をよそに
周治は考え込んでいた。

「ちょっと聞いていいかな?」

「?なんですか?」

「もしかして今って後漢時代で光武帝が治めてたりする?」

「何言ってるんですか?」

「……だよなーそんなb「そんなのあたりまえじゃないですか」ワホーイ」

趙雲が星ってことは真名なのだろう。つまりここは恋姫＋無双の世界である。

そう悟った周治は……しばらくフリーズするのであった。

第1話 呼ばれてなくても俺参上！（後書き）

ということ、勝手に趙雲の姉を趙統にしました。実際の歴史では趙雲の子供

って事になっているんですが、そんなところで続かないと思われるので！（マテ

こんな感じでオリジナルキャラやオリジナル要素が出てくるので、嫌な方は

今更ですけど、回れ右をどうぞ。そうでない方は……駄文ですがヨロシクです。

ではでは次話でお会いできたらいいですね？

ちなみに食料の計算は1日当たり3kgとして計算してありますのであしからず

第2話 旨い飯っていいよねー（前書き）

ということで第2話です。暇な時間と心のゆとりが……

あんまりないですけども、勢いで書きちゃってます。

出来れば石は投げないで……くれると嬉しいかなー

なんて思いながらも投下します！

第2話 旨い飯っていいよねー

「はいはいはいーっ！」

「んー、筋はいいけどもまだまだ甘いな〜」

そう言って星の槍を手を持った木の枝で軽々と捌いていく。

「師匠が強すぎるだけですっ！」

「そうかぁ？ 星も鍛えればまだまだ強くなれると思うんだけどな？」

「……師匠に追いつけますか？」

「ん、無理」

「むう……」

「二人とも〜お昼が出来ましたよ〜」

「お！ 星、昼だってよ。いや〜涙の料理は旨いからな〜♪」

「姉上の料理が旨いのは当たり前です……それより、食事が終わったら！」

「そうだなー、そろそろ技の一つでも教えてやろうかね」

「本当ですか!？」

「ま、基礎は十分だろうからな。この1年よく頑張ったよ」

「ありがとうございます!姉上っ!」

満面の笑みを浮かべながら家に向かって走っていく星を見ながら、周治は彼女達に出会ってからのことを思い出していた。この村にたどり着き、初めて二人に会ってからもう1年の月日が流れていた。いまでは二人から真名も預けられ一緒に暮らしている。それだけではなく、星に武術を教えるようになっていた。

「飯喰ったらどの技をおしえようかねえ……」

そういいながらのんびりと家まで戻り、涙^{ルイ}（趙統の真名）の料理に舌鼓を打つのだった。

「そういえば、前に言っていた名前ってどうするんです?」

「ん?」

「周治っていう名前だと目立つからって、名前を変えるって言うってじゃないですか」

「おー！　そういやあそんなことも言ってた気がするなあ」

「……忘れてましたね？　師匠」

「問題ない！」

そう彼は『水津樹　周治』という名前を隠し、新しい名前をつける
と数日前に二人に
宣言していたのだ。

「そうだなあ……」

「どんな名前にするんです？」

「んー………よし」

「？」

「決めたぞ」

「もう決めちゃったんですか！？」

「なんだ？　もっと悩んだほうがよかったのか？」

「いえ……そういうわけじゃないですが……」

「それで、なんていう名前なんです？」

「よしよし、聞いて驚け！姓は敖、名は潤、字は叔卿だ！」

「龍王の名前じゃないですか！」

「おーよく知ってたなあ」

「あら？真名は決めなかったんです？」

「……少しは動じるとかしてください姉上」

「あら、いい名前だと思うわよ？」

「そうだろうそうだろう！んで、真名は『朱兎』にするから」

「周治じゃないんです？」

「このほうが呼びやすいだろ？」

そう言いながら旨そうに食事をほおぼる朱兎を、涙は嬉しそうに見るのだった。

そして昼食後……

「さーて、んじゃ技を教えていくわけだけでも」

「はいっ！」

「とりあえず、この巻き藁を刹那の間（一秒の1／75・俗に言う一瞬）にどれだけ突けるかやってみー」

「刹那の間ですか……っ行きます！はああっ！！」

ガガガッッ！！

「っふ！はあ……どうですか？」

「……まだまだだなあ」

「まだまだですか……」

「いーかー？よく？見てろよ？」

「はいっ！」

「ッフ！覇極流千峰塵！」
はきよくりゆちほうじん

キンッ！

「……………え？」

星の見ている前で巻き藁は穴だらけになった。それも文字通り一瞬のことである。

説明しよう！はきよくりゆちほうじん覇極流千峰塵とは、槍術及び素手戦闘での体術。素手での闘技はかつさつけん活殺拳

と呼ばれるいる覇極流の技で、槍での突きによる連続攻撃である。文字通り目にも留まらぬ程の速さで、千の槍で突き相手を塵に返すほどの恐るべき速さの技である。

「見えたかー？」

「え……………つと……………槍がいっぱいになって……………」

「ははは、まあ見えなくてもしょうがないさ。先は長いんだ、ゆっくり覚えていきゃいい」

「はいっ！頑張ります！」

「おーし、それじゃー打ち込みを「賊だー！」おいおい……………」

「師匠！」

「星……お前は涙と一緒に村人を守れ」

「でも師匠は！」

「なーに、賊なんざあ……俺一人で十分だ」

「……気をつけてくださいね？」

「へいへい。おら、さっさと行け」

そういうと、星は名残惜しそうにチラチラとこちらを見ながら走って行った。

なぜか朱兎がそのまま居なくなるような予感を抑えながら……

第2話 旨い飯っていいよねー（後書き）

微妙なところで終わらせました。どうも作者です。

結構ストレス溜まってみたいなので、勢いと鬱憤晴らしに

ネタを詰め込みまくりで書いていこうと思ってます。

感想は楽しみにお待ちしてますので、ゼヒゼヒ書き込んでくださーい！

第1話を投稿して結構すぐに感想をくださったケイタ様！

感想第1号です！ありがとうございます！

大量の食料は、炊き出しや難民支援に使うかも知れませんか？

その辺は朱兎に聞いてくださいw

第3話 戦い……そして(前書き)

更新が滅茶苦茶遅くなってしまいました！

いろいろあったわけなんですけどね？

イイワケじゃないデスヨ？

第3話 戦い……そして

「やーれやれ、賊ってーのはアレかねえ」

朱兎はそういうしながら、村の端にある民家の屋根の上から見下ろしていた。

正確ではないが賊の数は、おおよそ100人。それは朱兎と対峙するにはあまりにも少ない数だった。

「さて……賊がこうして真昼間から堂々と襲ってくるってことは……
……イイ感じに
腐ってやがるんだろうなあ……そろそろ動く時期ってことかね……
……」

そういうながら一瞬ゆらりと揺れたかと思えば、次の瞬間には賊の集団の前に朱兎の姿があった。そして賊に向かってこう言い放った。

「悪いけどここから先は……通れねえぜ」

賊からしたら訳がわからないだろう。村を襲いに来たら、村の入り口で迎え撃とうとするものがたったの1人なのだ。

「なんだ？お前は」

「お前らに名乗るような名はねえよ」

「なんだとお？おいてめえら！さっさとブチ殺せ！」

リーダー格のような男がそう声をかけると、数人が剣を手に向かってきた。

「ふーん……なるべく死角が無いように数人で襲う程度の知恵はあるわけか……」

「さっきからごちゃごちゃとうるせえ野郎だな！さっさと殺せ！」

「^{からす}烏程度の知恵はある……と。おお！アレか！烏に賊でお前らは烏賊か！」

「なっ！ふざけやがって……！」

そういい激昂すると更に数人が襲い掛かってきた。その全てを軽々とかわしながら
軽口を叩いているのだから、相手が激昂するのも無理の無い話である。

「さーて……それじゃあちよつと痛い目を見てもらいますかねえ」

数分後……………

「そ…そんなばかな……100人以上はいたんだぞ!?それを皆殺しだと!?!」

「おいおい、人聞きの悪いこと言ってんじゃねえよ……誰も死んでねえだろうが」

「っな!」

そういうながら倒れている男を小突くと、軽くうめき声が聞こえた。

「で、どうするんだ?てめえもやんのか?あ”?」

「ひ、ひい！ゆ、許してくれ！！！」

「……ち、つまんねえな……まあいいや、コレに懲りたらまともに働くんだな」

「わ、わかった！」

「……さっさとこいつら起こして消えろよ」

そういうと、朱兎は興味を失ったように背を向けて歩き始めた。その背後から男が剣を振りかざし襲い掛かろうとした。しかし、なぜか足が地面に張り付いたように動かない！

「やめとけよ……動いたら……死ぬぜえ？」

「っひい！？」

「今回は見逃す……さっさと消えろ」

「ひひひひ！！？」

「二度目はねえぜ……」

そう言って少し強めの殺気をぶつける。ただそれだけで賊の頭目で
あろう男は意識を失った。

「やーれやれ……にしても、下手だねえ……俺も」

「師匠ー！」

「ああ……五月蠅いのが来たな……」

そう呟くと、またにぎやかな日常に戻ったのだった。

第3話 戦い……そして（後書き）

と、いうことで今回はもの凄く短いです。

いやゝ7月は仕事の休みが無かったのですよ。しんどかったゝ（しみじみ

そして萌将伝も出たし、DIVA?もやらないとだし……

エクストリーム難しいんじゃー！いまだに20曲程度しか攻略できてないとか！

まあこのSSと同時に別にも書き始めたっていうのが問題かもですが……

ゆっくりですが更新すると思いますので長い眼でみてやってくださいませ！

それでは、代給品様・白玉蓮華様！感想をありがとうございました！

感想のおかげで頑張っていけそうです！ではでは！

第4話 旅立ち? (前編) (前書き)

約5ヶ月ぶりの更新……

うまく書けてるといいな……

第4話 旅立ち? (前編)

賊を追い払ってから1年がたった。趙雲の修行も順調で千峰塵ほどとは

いかないが、それでも巻き藁を穴だらけにする位にはなっていた。

「あー星？」

「なんですか？師匠」

「お前って今いくつよ？」

「歳ですか？え…っと、14です。たぶん」

「覚えてねーのかよ……」

「姉上なら覚えているとおもうんですが……」

「まあいいや。とりあえず今出来る精一杯で千峰塵をやってみー」

「っ！はい！」

そう元気良く返事をする、巻き藁の前に立ち身体の力を抜き、適度に

脱力した状態を作った。そうして集中力を高め、それが極まった時

……

「はあっ！」 ガシユンッ！

まさしく刹那の間に巻き藁は穴だらけになった。しかしそれは朱兎が教えた

千峰塵には遠く及ばず、趙雲は肩を落とした。

「やっぱりまだまだ師匠には及びません……」

「いや、そんなにさっさと追いつかれても怖いからな？」

「うゝ」

「ま、まあ今日からは基本の順突きをやっていけ」

「基本ですか？毎日やっていますけど……」

「他の技とかも全部無しで、順突きだけな？」

「ええ！？基本が大事なのはわかりますが、そればかりだと！」

「まあまあ逸るな逸るな。いいか？順突きで腕の回転をしっかりとけるんだ」

「回転……ですか？」

「まあ百聞は一見に如かずだな。見てろよ？」

そう言ってどこからとも無く三叉の槍を取り出し、巻き藁に向かって構えた。
そしてなんの変哲もない、しかし目に見えないほどの速さで槍を突き出した。

「はっ！」　　ボツ！

おそらく槍が当たったのであろう。その瞬間に巻き藁が消し飛んだ。

「……師匠？」

「今のが順突きに回転、つまり纏絲勁を加えたものだな」

「纏絲勁……ですか」

「そうだ。いわゆるねじりだよ。ねじり、すなわち螺旋の動きって意味で、螺旋状
にねじった力（勁）を体内にめぐらせて発するわけだ」

「……えーっと」

「まあ難しく考えんな。やり方は書いておくから、ゆっくり練習すりゃいいさ」

「はいっ！」

「んじゃ帰って飯でも喰うかー！」

そう言って、趙雲を連れて家路に着くのであった。

そしてその夜。

「なあ涙」

「……そろそろ立たれるんですか？」

「気付いてたのか」

「それでもこの4年間ずっと一緒に居ましたから」

「4年か……そう考えると長かったな」

「そうですねえ。このまま嫁に貰ってもらえるかも？なんて思うこ

ともありましたけど」

「おいおい……まあとりあえずだ。俺は明日の夜出る」

「明日……ずいぶんと早いですね」

「まあな。これでも結構伸ばした方なんだぜ？ 星に技を教えるまでな」

「技をですか……」

「ああ、今日は俺がやって見せた。んで、コレが鍛錬法を書いたものだ。この4年の

間に文字の読み書きも教えてあるから大丈夫だろ」

そう言って白い巻物を1つ取り出した。

「でも行き詰ったら」

「その時は旅に出させてくれ。大まかにはコレに書いてあるが、旅立つ時にはこつちを渡してやってくれ」

そういいながらも1つ、今度は黒い巻物を取り出した。

「鍛錬が白で旅立ちが黒ですね？」

「ああ。……それから、修行が行き詰らなくても18になったら無理矢理にでも旅立た

せるようにな。で、星が旅立ったら洛陽に来るといい。たぶんその頃には、俺は洛陽に

居るはずだからな」

「いいんですか？その頃には可愛いお嫁さんとかいたりするんじゃない？」

「さあな？だが結婚はしてないと思うけどな。ま、恋人くらいはいるかもな」

「本当に行ってもいいんですか？」

「かまわねえよ。一人でおいとくのも心配だからな」

そう言い話を区切り、朱兎は杯を煽った。その杯を満たしている液体は、当然のことながら

酒である。このとき飲んでいたのはトウモロコシから作られた焼酎で『月夜の梟』^{ふくろう}というもの

であった。（作者も好きな酒である）

そして翌日……

「さて、星」

「はいっ師匠！」

「俺は今日でこの村を出る」

「えっ!？」

朱兎の言葉が信じられないのか、星は呆然としてしまっていた。

「まあ驚くのも無理はないけどな。それでももう決めたから」

「そんなんっ! まだ教えてもらいたいことがいっぱいあるのにつ!」

「……お前にはこの4年間でいろいろ教えたな」

「まだまだですっ！まだ足りないですっ！」

「まあ聞け。このまま俺がお前を育てるのも選択の一つだ」

「だったらそれでいいではありませんか！なぜ今なんですか！」

「お前はそれで嬉しいのか？」

「…え？」

嬉しいのか……そう問われ、星は即答できないでいた。本当は本人も気付いているのだ。このまま教えられるままに槍を極めても、それは己の武ではなく朱兎の模倣に過ぎないことを。

「わかっているんだろう？このまま行っても「でも！」ん？」

「でも、まだ2つです……たった2つしか技を覚えてないんです……」

「違うな。2つも教えたんだ」

「っ師匠……」

「いいか？教えた2つの技はな、達人と呼ばれる人間でもそうそう

使えるもの

じゃない。両方とも武の極みと言っても過言ではないものだ」

「武の極み……」

「今夜俺が村を発ったら涙から巻物を受け取るといい。それに鍛錬法を書いて

ある。……それから最後にもう一度だけ2つの技を見せてやる。ただし！

決して鍛錬法を他言しないことだ」

「……わかりました」

「この4年でお前にはいろいろ教えただろう？文字の読み書きから兵法や薬学

もな。それに歌や楽器まで教えただろう？」

「それはそうですが……」

「まあそう落ち込むな。お前にはこのギターをやるから。次ぎに会う時まで

一緒に演奏できるようになっていろよ？」

「それは……はいっ！わかりました！」

これ以上言っても朱兎の気持ちが変わらないことを悟ったのか、星は大人しく技を見ることにした。武とは模倣から始まるという言葉にもあるように、見る

ことはもつとも大事な鍛錬なのだ。

「じゃあその大岩に向かってやるからな。良く見ているよ？」

「師匠、出来ればあの順突きの方から見たいです！」

「ん？あれか……わかった」

纏糸勁を使った順突き……言うのは簡単だが、実際に使うとなるとその難易度は途方も無い物になるだろう。なにせ足元から全身を使った螺旋のエネルギーをきちんと対象物にぶつけないといけないのだ。

「いいかー良く見てろー？」

そういいながら、どこからとも無く取り出した三叉槍を構え、短い呼吸と共に一気に突き出した。

「はあっ！震雷っ！」 バガアアンツ！！！！

盛大な音を立てて大岩は砕けた。それなのに槍には傷一つ無く、陽光を浴びて

美しく輝いていた。

「師匠、今の技は震雷というのですか？」

「ん？名前を教えてなかったか？」

「はい、聞いてません」

「まあこの技は、お前ならモノにできるさ。そう趙雲おまえならな」

「私なら……ですか」

「どっちにしても鍛錬を怠ったら出来ないだろうけどな」

そういいながら三叉槍をしまい真紅の槍を取り出す。それは言わずとも知れた

光の御子の魔槍である。

「じゃあ次いくぞー」

軽く散歩するぞーというふうな感じでかけられた声は緊張感なぞ一切無かった。

しかしその槍には満遍なく闘気が込められ、鋼鉄の壁ですら貫き通す……そんな

異様な雰囲気醸し出していた。

第4話 旅立ち？（前編）（後書き）

続きは……脳内にて精製中なのでしばらくお待ちください。

待ってる人がいればですが。

あと、天意無法の歌武鬼者 鬼龍院猷侍郎様 感想ありがとうございました！

敖潤^{いっしゅん}って実は西海白龍王だったりするので、さり氣に

白を使った旗にしようかと思ってます。ということで

漆黒の布に金色の剣、槍、弓を交差させ

その上に純白で龍の一字

その字を囲うように真紅の龍を泳がせるつもりです。

案ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5809m/>

恋姫†異伝 ～混沌砕きし星辰の将～

2010年12月16日01時20分発行